

# 子どもたちの「<sup>①</sup>現在<sup>②</sup>」を考える

「いま子どもである人」にとつての  
「少子化」とは？

本田和子

(児童学者)

## 「大人」の語る「少子化」

子どもの数が減り続ける。出生率を示す線グラフに上昇の気配が見られず、人口動態上の未成年者人口は、その割合を下げ続けて止まることを忘れたかのよう……。

ことを教育の分野に限って見ても、小中学校の閉校や統合の話題と、廃校になった校舎の寒々とした映像が、テレビ画面などに大写しにされる。現象は過疎の農漁村に限られず、かつてベッドタウンと呼ばれて、若い夫婦と子どもたちの歓声であふれ返った郊外都市にまで及ぼうとしている。

こうした動きが、私ども大人を脅かすのは、将来に対する漠とした不安である。労働人口は激減するであろうし、それに伴う税収の低下も不可避であろう。結果としての国力の低下。一体、この国の未来はどうなるというのか。

本田和子 (ほんだますこ)  
児童学者。お茶の水女子大学前学長、名譽教授。  
『異文化として子ども』『子ども100年のエッセイ』  
『それでも子どもは減っていく』など著書多数。

しかし、これら耳にかまびすしい「少子化」への憂いは、すべて「いま大人である人」によって語られている。「暗い未来」もまた、彼らの描く未来像にほかならない。ならば、「少子化」は、「いま子どもである人」にとって、どんな意味を持ち、どのような状況として把握されているのだろうか。

### 「いま子どもである人」にとって「子どもは少ない」か、否か

子どもたちに「少子化」の及ぼす負の影響は、一般に、次のように語られることが多い。すなわち、「同世代仲間の乏しさ」「大人に囲まれて育つことのマイナス面」、結果としての「子どもらしさの喪失」などである。

しかし、「いま子どもである人たち」は、多くの子ども仲間にも囲まれて、「ガヤガヤワイワイ」と過ごした経験を持たず、「喪失した」とされる「子どもらしさ」なるものも知らない。一昔前と比較するすべを持った「大人たち」の苦々しい視線とは無縁に、彼らは「彼らとして」の子ども時代を過ごしているはずである。彼らの言動は、「いま子どもである人」の言動として、「子どもらしい」としか言いようがないではないか。

彼らが、子ども仲間にもまして大人から影響を受けやすく、大人から学習するものが多くいことに関して、彼らには何の責任もなく、また、それを負因とのみ数え立てるべきではないだろう。子どもが、人として成長していく過程で、生まれさせられたその社会が既に獲得している「文化のかたち」を、トラブルなく身につけていくことも、避け難い必須の課題であり、「文化型の習得」に関しては身近な大人たちの言動がモデルになる

とは周知の言説である。大人に囲まれて育つことは、「文化型の学習」には極めて有利な状況なのである。現在のこの国に生まれた子どもたちは、水道の使い方も、電気器具への対応も、果ては新種の通信器機とのつき合い方までも、格別の困難もなく身につけていくだろう。

文明度の高い社会に生まれ育つ子どもたちは、一昔前の村落共同体で育つ人たちのように、自然児であることも、仲間と群れて遊びつつ生き方を学んでいくことも許されない代わりに、大人たちから多くを学んで、「この社会文化の中で」巧みに生きていく技術を、無理なく獲得していくに違いない。

子ども自身、「少なく生まれさせられた」彼らにとって、「少子化」という現状に格別の意味はない。大人たちが深く深刻に話題とするこのことも、子どもたちにとってはあたりまえの日常であり、「そんな日常の中」で、彼らの日々は紡ぎ続けられていくのである。

### 保育施設という「いま」の日常」

わが国の場合、就学前児のおおよそ九割を超える子どもたちが、「保育施設」で成長の機会を持っているとされる。「子どものいない家庭」と「子どもだけがいる施設」と、この二者の往還が彼らの日常なのである。幼稚園にしろ、保育所にせよ、それは、同年齢の子どもたちが集められ、「子ども中心」のスケジュールで暮らすように設計された、「人為的・制度的」な時空間である。両者の間に横たわる懸隔は必ずしも小さくはない。

施設入所は、子どもにとって未知の新しい経験であるとは、従来から言い古されてきたことがらに過ぎない。そして、保育者たちは、「家庭」と「保育施設」間のギャップに戸惑う子どもたちを、いかに支援しようかと、さまざまに工夫を凝らしてきたはずである。それら過去の工夫の最たるものが、家庭的雰囲気を保ちつつ緩やかに子どもの適応を促すということであった。

しかし、従来の多子社会の子どもたちには兄弟があつたし、近所には遊び仲間もいたはずである。にもかかわらず、施設への入園は、「未経験の世界との出会い」と考えられ、慎重にきめ細かに扱われてきた。とすれば、子どもの減少は、両者間のギャップを、従来にまして大きく深刻なものとするはずである。にもかかわらず、子どもたちは、入園時に極端な不適應を示すこともなく、保育者たちにも格別の困難事とはされていない。彼らは、同世代の仲間の少ない暮らしを通して、異質の集団と共存するすべを身につけてしまったのだろうか。

このことは、彼らを支援する大人たちにとつても、より新しい認識事項であろう。人口減少下の社会では、労働力の補填、社会的活力の維持、あるいは固有の文化の敷延など、いずれをとつても、国や人種を異にする人たちとの共働が不可欠だからである。

「家庭」と「保育施設」というこの異質の二者間を、子どもらとその異質性を感受しつつ往還することは、彼らにとって意義深いものであろうし、保育者にとつても、その重要性が認識されるべきと思うからである。